

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	兩批評家に答ふ : 批評
Author(s)	T.K. 生
Citation	龍南會雜誌, 35 : 59 - 64
Issue date	1895-04-05
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/4557">http://hdl.handle.net/2298/4557</a>
Right	

資格具有せられんこと、到底得べからず候。

翻つて今日の状態を見候へば、誠ニ茫然自失せざるを得ず、足下の茫然自失せられ候事、當然に候。夫れ九州の地、地方三千里、人口六百萬、北に魯西亞あり、南に台灣あり、西に支那朝鮮あり、東に本土四國あり、これ誠に大に爲すべきの地に候。而も普通教育の盛あらざる今日の如きは、豈國家の爲に嘆すべきことに候はずや。グラッドストーン氏は英國の大政治家に候、幼壯の時より數學の研究怠らず、後英國政府の財政を掌りて、大に功を立て候。故に埃及、耳古の事變に際し、能く國家の財政を治めたるは、數學を賤めざりし結果に候。レセップ氏は佛國の大工學者に候、能く地理を修めて、天下の形勢を暗んじ、深く世界の大勢を察し、遂に大功業を世界にたて候。故に蘇士運河を開鑿して、世界の商業上の大利益をなすを得たるは、地理に心を用ゐたりし結果に候。之を我國法學生が、法學の之を知りて他の學科を賤し、工學生が、工學のみを學びて、他に心を用ゐざるに比し候へば、果して如何。普通學の智識あくまては、専門科の研究は得べからず候、他の學科に疎くしては、一學科の成功は望みがたく候。一部生は二部的學科を賤み、二部生は一部の學科を疎んじ候ては、國民の資格の具有は望むべからず候。夫を放言高論して自ら得たりとし、空理に馳せて實事に疎く、玄を談じて世を賤むるは、普通學科を修めざる弊に候。一たび普通學科普及致し、天下の學生普通學科の眞味を解するに致り候は、かの虛文、空文、輕文、軟文はすべて自ら消滅に歸し申すべく候。龍南誌上光燄萬丈の光景は火を觀るよりも明かに候。僕の信じ候ところ、まことにかくの如し。夫れ慮患擾なく、忠過罪なし、愚者意を陳じて、智者之を論ずと申候。足下願くは、僕の意のあるところを察せられ候て、僕に教へられ候は、僕の幸何物か之に勝り候べき。敢て愚信を陳じ候、再拜。

### 兩批評家に答ふ

T、K、生

兩批評家先生足下初夏の候計らずも足下等の高説に接して以來、九夏三伏も過ぎ、秋風落葉も心なく打過ぎ、年暮れて一陽來復となり

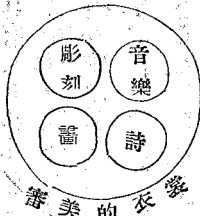
初めて生の答辭をなすこと足下等に對して恐縮の至りに堪へず、されど言未だ終らざるに忽ち人を攻撃することに果して無禮ぢらずせば、生が、日月後れて答辭をなすも敢て禮を失せりとは爲す可らざる可し。足下等は生等の先覺。到底及ぶ所に非ず。然れども思ふ所異なれば辯せざるを得ず。況んや答へざるは却て禮を失するに於てや。

突評子足下。足下と生とは一面の識になきもの然りと雖同く龍鬚白屑共に同窓の下に學ぶ者、敢て多少の縁なきに非るべし。生は足下の何人たるを知る能はず。然れど足下の批評眼の明快到徹、善く論者の要點を衝きて餘力なからしむるの技量に服す。生が議論の如きは粗鹵杜撰、而も牛刀を以て之を割かんこと、生豈に畏縮せざるを得んや。而も『科學の發達と共に詩人は(眞の)減退す』との主義を御取り遊ばざるより、マコレーも一股肱を得たるを地下に微笑するなるべし。余談はさて置き、乞ふ共にフイリッポの野に向はむ。

突評子先づ馬を陣頭に立てて揚言して曰く、『吾曹は二の錯誤と二の矛盾とを認む』と。生先づこの宣言を聞きて背進すること數百歩。省みて再び其揚言する所を聞くに曰く。

君は詩人の定義を述べて曰く、『要するに詩人は感ずる所鋭敏に會得する所深奥に、着眼すること遠大にして、是を顯はすに審美的衣裳を被らしむる技量あるものなり』と。然らば即ち音樂家も亦詩人なり、畫家も亦詩人なり。抑も亦彫刻家も亦詩人なりと謂ふべし。蓋、美術家と詩人とは混合せるなり。宗教は善を教ゆ、哲學家は眞を説く、善を取り眞を取り之に美を加へて之を表出するものは美術家に非ずや、故に美術家は即ち感ずる所鋭敏ならざる可らず、會得する所深奥ならざる可らず、着眼する所遠大ならざる可らず、而して審美的衣裳を被らしむる技量あらざる可らず、詩人は美術家の一なり。君の定義は蓋し廣きに失せるなり。

又、前言は即ち突評子が所謂『之の一の錯誤とす』との失を放てる者。其言ふ所一見眞に理あるが如し。而も乞ふらくは我言の眞意を味へ。蓋突評子は生が『審美的衣裳』てふ語の果して何を指したるかを了解せざる者なり。此語だに了解したらんには、突評子の前言は決して出つ可らざる者なり。足下は果して『審美的衣裳』を如何なる意味に取りたるか。前言に由れば明かに、其意を誤解せり、生が形容詞を用ひたるを未だ知らざるなり。今足下の『審美的衣裳』てふ語に對する觀念を分解せば左の如くならむ。



即ち足下は明らかに生が『審美的衣裳』の語に對する觀念と廣狹の點を異にせり。生が此語を用ひたるは即ち『詩』に對する形容詞のみに用ひたるなり。生は『審美的衣裳』は即ち『詩』(Poetry)に對する形容詞のみに用ひたるなり。生は『審美的衣裳』とせるが如し。故に生の語は『要するに詩人は感ずる所鋭敏に、會得する所深奥に、着眼する所遠大にして、是を顯はすに詩の衣を被らしむる技量あるものなり』と同一意の語たるなり。然るを足下は此意を了解せず、鬼の頭でも取りたむごとくに高言せらる。蓋し大早計と云はざる可らず。此く云はゞ足下必ず言はむ。『審美的衣裳』を其儘に解するときは決して

て「詩」のみの意に解すべからざるなり。然れども、語の意を解するには其場合を見ざるべからず。語は客なり場合は主なり。客は主を制すべからず。主、客を制す。生が審美的衣裳の語は是を詩人の場合に用ひたり。然らば敢て是を裸躰にして云はすとも、直に「詩」の意味に用ひたるや明瞭なるに非ずや。是れ足下のみならず、長嘯子も又同一徹の語謬に陥れり云ふべし。長嘯子又突評子と口を並べて高聲に宣すらく。

更に君の最後に興へたる定義は最普通にして最も解し易きものたるに係はらず、詩人——即畫家——即音樂家——即彫刻家の定義たるに係はらず、亦これを誤れりと言はぬに係らず、滔々として論し玉ひたる「詩人の定義」の一章は何如なる詩人を云ひ玉ふかを明瞭に説きたりとは云ふ能はず

き、嗚呼、似たりや、似たり、瓜二つに分りたらん如きの御兩説。而も共に同一の不了解に陥られたるは奇と云ふべきい、可笑しと云ふべきか。實は、たばら痛きことなりけり。而も兩批評家先生にして語の意を了解するには其現はれたる通りに解する外評者の地位に於ては關せざと言はゞ、是實に無責任無鉄砲も甚だしきと云はざる可らず。さすがは、赤門を通りなざる丈ありて、是丈の言は申されざりき。

特に突評子は自家撞着の言を吐き散らされたり。曰く「君の定義は蓋し廣きに失せるなり」と言ふこと未だ止まざるにやがて「之を一の錯誤とす」と言はる。廣きに失したらば未だ錯誤とは言ふ可らず。錯誤と言はゞ、廣きに失せりとは云ふべからず。足下の言は恰も、生が仮りに煎餅は菓子なりと云ひしを、足下叱して「其語廣きに失せり」(暗に煎餅は菓子と云ふことは知り乍ら)と言ひ終りて、「之を一の錯誤とす」と言ふは何ぞ異むらむ。ア、煎餅は菓子に非るか。(生は菓子は煎餅なりとは云はせ。又美術家は詩人なりとは云はせ)。然るを煎餅は菓子なりと云ふ豈に錯誤と云ふへけんや。此點に於ては突評子は長嘯子と思はず、鉢合せをなしたる者と云はざる可らず、何と云へば、長嘯子は「誤れり」と言はぬに係らず云々と言はれたればなり。兩批評家の鉢合せ火を出さずは即ち幸なり。突評子よ。是れ所謂弘法も筆の誤。猿も木から落つることも評すべき者か、少しく論理學に合せざるが如し。況んや。生不肯と云へども、詩人を以て美術家と同一視せざりしに於てをや。

突評子再び第二の矢を放つ曰く、

君は又「詩人に必要なるは音樂的觀念なり、發しては歌となり、現はれては畫なり、音樂となり、詩となる」と云ふ、吾曹淺學未だ音樂的觀念あるか故に能く畫家たるを知らず。何と云へば音樂的觀念とは詩人をして排律節調の妙を得せしむる云へばあり。

と。明治の利、其漢學先生あり。人 Repudiate を共和政體と譯して先生に示す。先生の曰く「何、共和政體と云ふか。周の世政治なきことあり。稱して共和と云へり。然らば共和政體とは無政府のことならずや」と愕然として袖を拂ふ。と烏鬼勿々明治今日の文明又此漢學先生と同一笑話を残すものあらんと思ひきや。突評子よ。足下はいみじく誤をなされたものかな。Musical Thought を譯して音樂

的觀念となされしは、譯されたる御苦勞なることながら實は難有迷惑の話なり。生鈍驚と云ふとも、豈に畫の本源と音樂の本源を混合するものならんや。生が Musical thought を譯せしりしは此混同の恐れありしを以て故らに原語を以て書したるなり。然るを足下は其意の存する處を對らす猥りに音樂的觀念を譯するのみならず、其意味をも誤解して單に「排律節々云々」をされしは果して何たる事ぞや。「Musical Thought」にして心あらば將た足下の處置に激怒すべし。そも小生が此語の意はカーライルが用ひたる意と同様用ひたる者にして、其意義については Harmony を殆ど同一の意味にカーライルは用ひたりと信定。「Musical: How much lies in that?」………などと呼びたる處などは少しく味はれたし。カーライル也。

If your delineation be authentically musical, musical not in word only, but in heart and substance, in all the thoughts and utterances of it, in the whole conception of it, then it will be poetical, if not, not.

など云へるは眞に意味深長なる言葉に非ずや。突評子足下この邊を詳に察せば Musical thought の意は決して、語夫自身のみ (The word only) 意では非るを知るべし。足下夫れ是を察せざ、是を二の錯誤となす」とは何たる囈語ぞ。明治初代の某漢學先生の列に入らざれば即ち可なり。

突評子の錯誤の二矢は盡きたり。尙ほ「矛盾」てふ矢二つを有し。先づ放つ一矢には曰く

君は「審美上より云へば美は何處に存在するかを問ふは誤れり」と斷定し乍ら更に、「詩人は即ちこの(美を看別する)見識を有し、この價值を知る」と云ふ。之を「一の矛盾となす」。

そ、ア、代言的口調も茲に至りて極まれりと云ふべし。そも生が「審美上より云ふときは美は何處に存在するかを問ふは誤れり」と言ひし真意は美は客觀的存在に非ずして主觀的に人が知覺する者たりとの普通の審美上の語を云へるに過ぎず。然るに「詩人は即ちこの見識を有すること多きなり。眞の價值を知る明あるなり」と云ひしことが果して何處に撞着矛盾ありとするか。矛盾は相反對を意味す。「美を看別する見識」と云ふことが美は主觀的存在なりと云ふことと相反せりと云ふが。小生の所謂美を看別する見識」さば、例令は茲に美と云ふ存在物が主觀を離れて、客觀的に存在する者を見ること云ふことに非ずして、(若し、しか云はば足下の言の如く撞着せらむ)其色・形等に由りて組織せられたる者が、是は果して美なるか醜なるかを判斷し得る力をこそ、生が云ふ見識さば言ふなれ。而してこの判定を付くるは即ち人の意思にして、美が其自身に存在すこと云ふことはあらぬなり、人がよく心に感應してこそ美妙崇高も存すれ。而してこの力大なるは詩人の特性に非ずや。生の「眞の價值を知る」とは即ちこの特性を利用して働かしめたる結果を云ふ。かく觀し來るときは果して足下の矛盾の語何處にか存する。足下も又人を誣ふるの甚しき者と云はざる可らぞ。

愈々出で愈々奇なるを突評子の所謂第二の矛盾なる者なり。約子定規も程にこうよれ、突評子の如きは強ひて人の言をして矛盾なり、錯誤なりと云ふ、余輩は頗る足下の言を訝む。足下は曰く

君は又詩人なる一語を以て或は美術家となし、或は世の所謂詩人となす、殆んどラスキンとやらが「アート」とやらの語を以て、美術と偽術とに混同するところの感あり。之を二の矛盾となす

と詩人を以て美術家の全体と認めざりしは前段詳はしく之を答辯せり。而も足下は尙ほ美術家と見なすとの前提を置き以て、之れは即ち矛盾なりなど言はる。足下の言は前提未だ決定せざるに直に斷定を持來れり、言誤らざるを得ずとするも豈得べけんや。若し果して「詩人を或は美術家となし、或は世の所謂詩人となす」この言真なりせば、先づ是が例証を擧げざる可らず、只單に君はかく云へり、故に誤なりと、獨り合點の事を言ふとも、入寧之之れに服せんや。況んや、生は足下の言の如きことは言はざるに於ておや。足下は又ラスキンの美術論を引き來りて云々せらる。松本源太郎氏（哲學雜誌ラスキン美術論參考）は嘆かし足下のこの引照の爲めに満足せらるることならんを信ず。美術と偽術とを混同したる故に矛盾なりと又少し足下にも似合はぬ論理法なるかな。

突評子足下、足下も又利口者なるや。眞に吾曹の管見たるに過ぎず」と云ふ。ア、生は多言せり。これ勢已むを得ざるのみ。足下は既に生等に先だちて學ぶ者、敢て御高説に接する之に過ぎる光榮あらんや。庶くは禮を失するあらば幸に恕せよ。

長嘯子足下、足下と生とは又一面の識だになき者（？）足下には又改めて多謝せざる可らず、何となれば足下は生を指して大膽者との御賞言のありたればなり。生未だ豚尾漢一匹だに握りたることなし。暗夜の地蔵に對してすら戰慄する怯懦者なり。然るを時節がら大膽者との御嘉賞あり萬謝々々、只怨む、抽象的に馳せて金鵄勳章なきことを。然れども、醜て思ふに足下は亦實に長縮すべき大膽の御方と稱せざる可らず。何となれば、大膽者と云はれたる小生に向て突貫攻撃なると御方あればなり。『時は黄金なり』を不足下の語る所を聞ゆむ。

足下の先づ鋒の向ふ所を察するに突評子と大同小異なりと云はざる可らず。足下は曰く、

第一 君がいへる詩人は極めて廣き意義を有せる詩人ならむ。

第二 あはれ詩人とは音楽家の義、そもく格調に伴へる韻文作者の義、

第三 殊に畫なるの基なと、ハノの Musical thought に歸し玉ふに至りては、われ不幸にして深遠なる哲理とやらを解せざるを悲む。

第四 Harmony は Musical thought と異なれり。

と長嘯子足下、足下は誠に賢明の批評家、小生の到底及ぶ所に非ず。然れども足下にして亦以上の言あるに至ては生實に足下大々の大膽の御方の爲めに愛惜せざるを得ず。第一の言の然らざるは是を突評子の答に於て論したり。第二のことに至りては、足下が突評子と同じく Musical thought を以て單に音楽上の意義の如くに解せられたるに依る第三、第四又實にこの誤解に基く。然り而して足下はさすがに突評子よりは明瞭なりき。何となれば某漢學先生の如く狼りに譯字上の意味を取らずして、他に新に Harmony の語を持來られたればなり。足下は言ふ Harmony を Musical thought とは異なれり。誠に明論と云はざる可らず生は只しを思はざる。カヲヲ

が用ひたる通りに是を用ひたるのみ。是笑評子への答辨中明らかに是を云へり。足下よ。御互に是に付きては余りに差出らぬ方仕極なるべし。識者は必ず空囃きて微笑せるなるらむ。足下は曰ふ

特にワシントンの前にバトリック・ヘンリーあり、頼朝の前に文覺上人ありしことを知り、斯る詩人の前には、かゝる先驅をなせる者あるを知り云々

と足下も又随分、インキナ人なるかな。誰れか、此の如きことを云ひたる。足下は之を生に歸せんとするか。足下の生の文を精讀せざる又甚しと云はざる可らむ。誰れか、ワシントンを詩人と云び、ヘンリーを詩人と呼び、頼朝、文覺を詩伯と云んや。生は果して何と云ひしぞ。曰く

蓋偉人は時勢の子なり。

これ即ち『ワシントン云々』と云はんとする前提の語なりき。(偉人の中には詩人とは限らば)然るに足下はこの語あるを察せざり、獨りに、得意げに、『かゝる詩人の前に、かゝる先驅云々』と云ふに至りては生實に呆然たらざるを得むや。敢て足下に呈す、他人の論を評せんせば先づ、其の言の出づる前後を鑑みざる可らむ。然らずして人を難す、人譽ぞ服せんや。

重ねて足下に謝す。足下は第二十八號に於て暫く生の講師とせられたることを、『Hammer』は詩歌書樂の缺く可らざる所なり、アイ是千古に渡れる格言なり。審美學上の一大真理を講釋せられたる者と云ふべし。『ウォルテル』曰はすや。論するに先ちて其意義を定むるを要す』と生、生れて始めてこの一大語を聞く。足下なかりせば或は之を聴くことを得ざりしならん。長嘯子も、かゝる真理を包蔵する足下にして何ぞ、しかく匿名を事とするか。御本名出てたらば、思ふに小生の識なき人には非るべし。桃列再び都門に昇れり。爐を擁して相論する亦一興に非ずや。

兩批評家足下。生は甚しく足下等に無禮行をなせり。アイ『物言へば唇寒し秋の風』。足下等の高説以て生を脅みざるがことき、こぞきを謝す。願くば爾後益々斧正を給はらんことを、時國家正に多事幸に御自愛事一なれ。

(明治廿八年一月上旬脱稿)